



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「ローマのエレギー」：ゲーテの古典主義についての一考察
Author(s)	小栗, 浩
Citation	北海道大學文學部紀要, 12, 181-203
Issue Date	1964-03-18
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33288
Type	departmental bulletin paper
File Information	12_P181-203.pdf



「ローマのエレギー」

——ゲーテの古典主義についての一考察——

小

栗

浩

「ローマのエレギー」

—ゲーテの古典主義についての一考察—

小 栗 浩

Und soll' ich nicht, sehnüchtester Gewalt,
Ins Leben ziehn die einzigste Gestalt?

(Faust, 7438—39)

私だつてこれほどの憧れの力をもつてすれば、
又とないあの姿を、うつつかえすことができる
でしょう。

一、序 言

先に筆者はゲーテの「西東詩集、ズライカ書」について述べる機会をもつた。(北大文学部紀要、Ⅻ) そこにおいて、ゲーテはすでに古典主義を遠く背後にし、東方の自由な想像的世界に身をゆだね、古典主義的制約をフモリスティシユにかえりみる詩境にあつた。それはたとえば「西東詩集」のつぎの短い詩に的確に表現されているであらう。

Mag der Grieche seinen Ton
Zu Gestalten drücken,
An der eignen Hände Sohn
Steigern sein Entzücken;

北大文学部紀要

Aber uns ist wonnereich
In den Euphrat greifen,
Und im flüss'gen Element
Hin und wieder schweifen.

(Buch des Sängers: Lied und Gebilde)⁽¹⁾

(ギリシア人は粘土をば
こねて形をつくりだし、
わが手になれる子をばみて
よろこぶこともままならん。
されどわれらにうれしきは
オイフラートにとび入りて、
ながるる水のなかにして
かなたこなたに泳ぐこと。)

ユーフラテスの河に身をまかせながら流れのまにまにすくいあげ
る水は玉となつて響きを発する。その自在な詩的創造のさまに詩人
は自ら驚喜しているようである。そこには、かつてのように母国語
に不自然な制約を与えねばならぬための苦渋はない。詩人は再びド
イツ語の自然なリズムに従い、時には若き日の自由律を用い、ある
いはまたペルシアのガゼール形式を自由に援用しつつ、天衣無縫な
想像の世界にあそぶ。「西東詩集」をひもとくものは、詩人自身に
も予期しえなかつた天恵ともいふべき第三の青春を享受する老ゲー
テの円熟した詩想に讃嘆するとともに、彼の中期を形成する古典主

義をものりこえることのできた、その生活的ならびに詩的なエネルギーの強大さに驚かざるをえない。

ところで我々は今、しばらく時代をさかのぼつて、老ゲーテがかつてをかえりみて「粘土をこねて形をつくりだした」といつた時代、すなわち古典期におけるゲーテの詩作と思想に対して若干の考察を試みようと思う。それは、彼の古典主義の発展深化を主題としつつ、さらにそれからの脱却の過程をも考察の対象とするであらう。

ゲーテのイタリア―古典的世界―への憧れはもはやあまりにもいいふるされたことであらう。「最近数年間というものはまことに一種の病氣のような状態で、それを治しうるのはただこの目でこの地をながめ、この身をここに移すことだけであつた……」(一七八六年十一月一日)。これに類する言葉は彼の「イタリアの旅」の随所に見いだされ、我々もまたそれをそのままにうけとつてさしつかえない。ゲーテのイタリア体験をまつてその古典主義が完成されたということもまた通説に属する。そうして、その成果として「イフィゲニー」や「タソー」の如き作品があることもあまねく知られたことである。ところで、ここでまず注意すべきは、それらの作品がイタリアの地で完成されたことはたしかであるが、その構想はずつと早く、前者は一七七九年、後者は一七八〇年である。それらは幾度か手を加えられ、最後の完成をまちながらイタリアにもちこまれたのである。それらはたしかに古典主義の精神によつて完成されている。しかしそれらはその存在を純粹にイタリアに負うのではない。

い。もし人がゲーテのイタリア体験を重視し、その純粹な芸術的形象化を求めるならば、それは他のところになければならない。すなわち我々がこれからとりあげようとする「ローマのエレギー」(Römische Elegien)がそれなのである。グンドルフの言い方をかりれば、「決定的にイタリア的な、そしてイタリアによつてのみ生まれえた唯一の作品」こそはこの「ローマのエレギー」^(三)なのである。もとより、この作品にもられているのはゲーテのイタリア体験だけではない。作品の主題はむしろ詩人とローマの女ファウステイーネとの愛の生活であるが、ファウステイーネが詩人の心に明確な映像をむすぶためには詩人のドイツにおける体験が必要であつた。愛人クリステイアーネ・ヴルピウスとの出会いなくして、「ローマはローマたりえな」(第一歌)かつたといつてもよいのである。だが事実はやはり逆であらう。ゲーテのイタリア体験がなかつたならば、クリステイアーネはそもそもゲーテにとつては存在しえなかつたという方が真実であらう。ゲーテのイタリア体験がいれば、その生活的芸術的必然によつて一人の女性をよびだし、彼女に存在意義を与えることができたのである。それは、「西東詩集」におけるゲーテが、東方の体験によつてはじめてマリアンネ・ズライカという女性をよびだしたのとひとしい。むしろ、いたる所でまたいかなる時にも愛する女性を見いだしたゲーテであるから、たまたまマリアンネ、クリステイアーネその他さまざまな名の女性が彼の前にあらわれ、時に彼から愛の詩をささげられることがあつたとしても別に不思議ではない。ここで問題なのは、クリステイアーネがファ

ウステイーネとなるためには、詩的重心は圧倒的に詩人自身の体験と芸術意志にかかっているということである。「ローマのエレギー」はドイツの土地でドイツの女との愛を一つの契機として生まれた。しかしこの体験もこの詩作も、本質的にはまさにゲーテのイタリア体験に由来するといわなければならないのである。

ではゲーテのイタリア体験は古典期のゲーテにとつてどんな意味をもっているのだろうか。同じく古典主義の作品とされる「イフイゲーニエ」や「タソー」を「ローマのエレギー」とわかつものは何だろうか。この「エレギー」が「決定的にイタリア的、イタリアによつてのみ生まれえた」といわれるのはいかなる理由によるのであろうか。以下において我々は、「ローマのエレギー」の解釈を試みつつ、ゲーテ精神の発展におけるその意義をたずねようと思う。

一、フィローゲンポエート

Meine Sachen können nicht popular werden...

Sie sind nicht für die Masse geschrieben.

(Goethes Gespräch mit Eckermann, 11.

Okt. 1828)

私の書いたものはポピュラーになりえない...

それは大衆のために書かれたのではない。

ニーチエがリヒアルト・ヴァーグナーについて語つた有名な文章のなかにこういう箇所がある。

「ヴァーグナーの芸術は、これまで我々近代人をその光と影に包んできたあらゆるルネサンス文化と対立する。ヴァーグナーの芸術は我々をしばしその外へつれ出してくれるから、我々はそこではじめてルネサンス文化の一樣な性格を見ぬことができる。そのばあいゲーテやレオパルディーは、イタリアの文献学者・詩人たち (Philologen-Poeten) の最後の偉大な遅参者であると我々には思われる...」

ルネサンスとフマニスムスの生きた伝統を自分のものとして体験しえない我々東方の人間にとつて、ニーチエのこの感じ方はよほど重視しなければならないであろう。フマニスムもルネサンスも、たしかに後世においては、人権尊重、個の自覚などの名において庶民的デモクラシーの思想をうながす機縁となつたにはちがいないが、その本来の姿においてはすこぶる非民衆的な、えらばれた少数者の純学問的な営みであつた。今日、フマニスムス——ヒューマニズム——という言葉は、ほとんど政治的自由主義あるいは急進主義の同義語とさえされ、その本質をなす古典古代とのつながりを全くすてさつているように思われる。我々は歴史の進歩ないし変貌のはげしさに驚かざるをえないのである。ここで我々は、たとえば若きニーチエがバーゼルの公衆を前にしてギムナジウムの教育改革案を唱えたことを思いだす。彼はそこで古典語教育の重要性を強調し、しかもそれを授けられるべきものを特に有能な少数者に限らなければならぬことを主張している。それは、十九世紀半ば以来顕著になつてきたところの、フマニスムスをデモクラシーの同義語たらしめるような傾向に対する、まことに反時代的な考察であつ

た。ニーチェが心を通わせることのできた少数の友人の一人ヤーコプ・ブルクハルトが、その「ギリシア文化史」を開講するにあたって、学生の大半が大学入学と同時に古典語を放棄してしまうことを指摘し、今日の人々が、*Ewigung*（ではなくもつぱら *Zeitung*）のみで生きている現状を嘆いているのも、ニーチェと同じ観点からいわれているのであらう。古典古代が忘却にゆだねられることが文化にとつて喜ぶべきことであるかどうか、それはさしあたりここでの問題ではない。我々にとつては、古典古代につながるフアニスムスの文化が、ゲーテをしんがりとしてますます背景にしりぞいていった事実を確認すればたりる。視野をドイツ文学だけに限つても、十九世紀半ばにおける、古典主義、ロマン主義から現実主義的文学への転回は目をみはらせるようなきわだつた現象であるが、それは一言にして少数者のための貴族主義から多数者のためのデモクラシーへの転回といふことができる。だから、一八三二年「大」ゲーテが死んだとき——ほとんど時を同じくして、ヘーゲルは一八三二年、シュライエルマツヘルは一八三四年に世を去つた。これら三巨星の死は、古典的貴族主義の時代が終つたことを象徴するのであつて、まさにハイネによつて「芸術時代の終焉」といわれるにふさわしい——一般大衆の間に深甚なる「ウッフ」(uff!) の声がきかれたといふことは、ゲーテ自らが自己の文学を規定していつたところの「ポピュラーになりえない」文学が今こそ我らのものになるであらうという、人々の期待の表現でもあつた。現実主義の文学が世紀末に近づいてついに自然主義を旗印にかかせるようになると、古典主

義時代、あるいはロマン主義をも含めていえば芸術時代との隔りは一そうきわだつてこざるをえない。そういう流れのなかに身をおいて考えれば、フアニスムスの流れをつぐ最後の芸術時代を象徴するゲーテの姿は見まがいようもないわけであつて、「フィロローゲンポエート」というニーチェの呼称は、現代的視点からまことに鋭くゲーテの文学のあり方を規定したものといつてよい。

ニーチェがゲーテをフィロローゲンポエートというとき、それはゲーテの文学の全体的なあり方を示しているのであるが、より厳密な意味では、意識して古典古代を志向した時代のゲーテにあてはまる。それはゲーテのばあい単に文学のことにとどまらず、彼の人生観全般に及ぶこともまた論をまたないが、しかし古典の世界に学ぼうとする詩人にとつて必要な一つの条件は、まずフィロローギシユな問題、すなわち古典詩のプロゾディーをいかにして習得するかにかかつている。つまり、古典主義は擬古主義をその成立条件とするのである。古代の形式にならないながら、それが単なる古代の模倣——擬古主義——に終らぬかどうか、それはそれ以後のそれぞれの詩人の資質と力量の問題である。ゲーテやシラーについて彼らの古典主義が論ぜられることはわが国においてもすでに久しい。しかしそういう考察が、彼らの様式上の問題をとびこえて、もつぱら精神的な、あるいは人生観的な面にのみむけられていふとすれば、それは片手おちといわなければならない。古典主義はまず擬古主義にはじまる。ニーチェがゲーテについて「ギリシア人に対する身をけするような憧れ」(eine verzehrende Sehnsucht nach den Griechen)

といながら、同時にゲーテを「フィロローゲンポエト」として規定していることは、ドイツ人として別に珍らしいことではあるまいが、我々にとつてはかなりの注目に値する。我々はゲーテにおける古代のまねびを、あらためてそのフィロローギシュな、すなわちブローディシユな面から考えてみなければならぬ。ここでは、当面の「ローマのエレギー」を中心とする幾つかのエレギー形式の作品によつて、ゲーテが古代の詩形をどのように入れ、さらにそれをこえていつたかのあらましにふれておこうと思う。

「エレギー」は通常「悲歌」あるいは「哀歌」と訳されている。エレギーが本来悲しみの歌だけではなく、戦争、政治、生の享樂、あるいは道德的説教等さまざまな主題を内容とすることが周知であるにかかわらず、無難作に「悲歌」とされるのはどういうわけだろうか。それは、後世この詩形によつて嘆きや悲しみが多く歌われるようになったためであらう。すでにシラーもまたエレギーとイデユレの対立概念をたて、後者が実現された理想であるのに対して前者を実現されざる理想への憧れとしている。⁽¹⁰⁾この考えからすれば、ゲーテの「マリーエンバートのエレギー」やリルケの「ドゥイノのエレギー」を、内容に従つて「悲歌」と訳するのは適切であらう。しかしゲーテの「ローマのエレギー」は悲しみや憧れを歌っているのではなく、そこにあるのはむしろ理想の実現、シラー流にいえばイデユリシユな世界なのである。内容が悲しみに全く関係せず、形式もまた日本語訳では全然問題になりえない「エレギー」に「悲歌」という訳語を与える理由は一つもないのである。にもかかわらず「ロ

ーマ悲歌」の如き訳語を守ろうとするのは、たとえばオウイディウスの「アルス・アマートリア」がエレギー形式で書かれているからといつてこれを「悲歌」と呼ぶのが滑稽であるのと同然であらう。それは、名のみ知られて読まれることの多い「ローマのエレギー」をいたずらに誤解させるだけのことであらう。もしむりに邦訳を求めるならば、ゲーテがはじめこの作品を「エロティカ・ローマナ」と題したように、「ローマ愛艶歌」とでもするほかはあるまい。

さて、我々が問題とする「ローマのエレギー」のエレギーは、もつぱらその本来の意味、すなわち古代詩の形式のことにかかわる。周知のように、古代の詩は脚韻を用いることなく、その代りに四種の詩脚をもっている。トロヘウス(—)、ヤンブス(—)、ダクテュルス(—)、アナペースト(—)がこれである。(—)は—と等しいから、更にもう一つスポンデーウス(—)が考えられる。エレギー形式は、ダクテュルスによるヘクサメター(六歩格)と、同じくダクテュルスによるペンタメター(五歩格)——この二行をデイスティコンという——とが交替するやや長い詩のことであつた。(短いものはエピグラムといい、これまたゲーテが古典期に、特に「ヴェネチア短唱」Venezianische Epigrammeで試みている。)しかるに、ドイツ語は古代語のように音の量(長短)ではなく抑揚によつて規定されている。古代語では、長いシラブルもばあいによつて揚抑いずれにも発音しうるのであるが、ドイツ語では、強調のある場所には自然な話し方にそなわる揚音をおくしかない。そこでドイツ人は、古代詩の長音部にはド

イツ語の揚音をおき古代詩の短音部はドイツ語の抑音をもつてこれにかえることを考えた。従つて、古代詩のダクテュルス——（はドイツ語では×、××となる。しかしこれだけで問題はかたづかない。古代詩にはさらにスポンデーウス（——）がある。これはドイツ語では×、×となるが、このような語はドイツ語では例外的にしかない。ましてスポンデーウスが二つ続けばあいにはドイツ語では全く不可能になる。クロプシュトックは早くから、ドイツのヘクサメーターではダクテュルス（——）とトロヘーウス（——）を適宜用いるべきことを唱えていたが、古典学者はこれでは満足せず、トロヘーウスはつとめてさけること、更にドイツ語でもスポンデーウスが可能であり、古代の詩形になうためにはドイツ語の自然な発音を人工的にかえてよいとまで考えた。この主張の先頭に立つたのはヨハン・ハインリヒ・フォスとアウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルである。一七八一年、フォス訳による「オデュッセー」が現れる。一七九五年には彼の「ルイーゼ」が世に出る。ついで一七九六年にはW・シュレーゲルがイエーナにやつてきてヴァイマルのゲーテに接近する。このような形勢のもとにゲーテは謙虚に専門家の意見をききながら古代詩のプロゾディーを習得していくのである。フォスの「ルイーゼ」は今日からみればまことに迫力の乏しい作品であつて、学校教師的なヘクサメーターの練習書という印象を否定できないが、しかし古典期のゲーテに対する「ルイーゼ」の影響を軽視することはできない。ここには一二の例によつて彼の詩法をうかがつておこう。

— — — — —
 Drauf ant- wordest | du, ehr- würdiger | Pfarrer von | Grünau.
 (Luise : 1. Idylle, Das Fest im Walde, 43 u. oft.)

(するとグリユーナウの牧師なる君はこたえた)

右の詩行はフォスのつもりでは、符号をつけたように読まれるべきであつた。すなわち、ドイツ人は何人も *antworten, ehrwürdig* とは発音しないのであるが、フォスはスボンデーウス（———）の形をえるためにあえて不自然な発音を要求するのである。（形の上では *ant, ehr* の上にも強調があるが、位置の上からそれは弱く発音される。）同じ用例をもう一つあげよう。

Ihr ant- | worrete | drauf | der | edle, be- | scheidene | Walter.
(l. c. 66 u. oft)

(すると立派で謙遜なヴァルターは彼女にこたえた)

その他で目立つのは縮小詞が頻繁に用いられることである。

Mutter, Vater の代りに Mütterchen, Väterchen が用いられる如きである。これはトロヘウス（——）をさけてダクテュルスの先例は意外なところでゲーテに悪い影響を与えている。たとえば「ヘルマンとドロテア」の第二歌につきの詩句がみられる。

Die Gesinnung ist löslich, und wahr ist auch die Geschichte,
Mütterchen, die du erzählst. ^(1. ED)
(159—60)

（その気持はみあげたものだ。母さんや、おまえの話にまちがいはない）

この Mütterchen は、ヴィクトル・ヘーンが指摘しているように（二五）

Mutter でなければならぬ。なぜなら、この夫妻は他のところでは縮小詞を用いていないからである。同じように、「アレクシスとドーラ」の四十行に、

Und das Mütterchen ging feierlich neben dir her. (16)

(お母さんはいかめしげにあなたとならんで歩いていった)とあるが、これもヘーレンによれば Mütterchen はあとに feierlich (いかめしげに) という語があるのからしても不適当である。この責任はフォスにある (daran schuld) という。

しかしフォスよりもっと大きな影響をゲーテに与えたのは W・シュレーゲルである。一例をあげよう。「アレクシスとドーラ」の冒頭は、信頼すべき諸版 (ヴァイマル版、ロッタ記念版、マイヤー版、マネッセ版) では いさめ のようになっている。

Ach! unauffallsam strebet das Schiff mit jedem Momente
Durch die schäumende Fluth weiter und weiter hinaus!
Langhin furcht sich die Geleise des Kiels, worin die Delphine
Springend folgen, als flog' ihnen die Beute davon.

Alles deutet auf glückliche Fahrt: der ruhige Bootsmann
Ruckt am Segel gelind, das sich für alle bemüht,
Vorwärts dringt der Schiffenden Geist, wie Flaggen und
Wimpel;

Einer nur steht rückwärts traurig gewendet am Mast... (17)
(注) ヴァイマル版以外は Fluth→Flut, Geleise→Gleise, へんじふんが、それはここでは重要ではない)

(ああ、今や船はとどめがたし。刻々と

泡だつ潮かきわけて沖へ沖へとのりいでぬ。

竜骨は長き水脈ひき、いるかはとびて

獲物のがさじと船をおう。

なべては幸ある船路のきざし。船人もまた

手をば休め、帆のみひとり船をあやつる。

大旗小旗ひらめきて、なべての心は先を急ぐ。

ここにひとり男あり、マストによりて悲しげにしりえをながむ...)

ところが、この箇所の子三行目以下はハンプブルク版ではつぎのようになっている。

Lange Furchen hinter sich ziehend, worin die Delphine

Springend folgen, als flog' ihnen die Beute davon.

Alles deutet die glücklichste Fahrt: der ruhige Schiffer

Ruckt am Segel gelind, das sich statt seiner bemüht;

Alle Gedanken sind vorwärts gerichtet, wie Flaggen und

Wimpel.

Nur Ein Trauriger steht, rückwärts gewendet, am Mast... (18)

このちがいはどこからくるのであろうか。我々は、ヴァイマル版その他のすぐれた全集に示された詳細なテキストの異同によつて、それらが異なる原稿に基いているのを知っている。この詩が最初に発表されたのはシラーの「芸神年鑑」一七九七年であるが、ヴァイマル版は一七九二—一八〇〇年の「ゲーテ新著作集」Göthes neue

Schriften によつてゐる。つまり、この両版の間には W・シェーゲルの修正意見が介入しているのであつて、その異同はつぎのような意味をもつてであらう。

Longe Furchen は——であるが、トロヘウスをさけるため Langhin ——と改められる。Schiffer が Bootsmann とされたのは、——を——としてトロヘウスを生かすためであらう。Alle Gedanken sind vorwärts gerichtet は——であるが Vorwärts dringt der Schiffenden Geist は——である。即ちスポンデーウス(——)の効果を出すために vorwärts (——)を強制して——としてゐるのである。最後の行の Nur Ein Trauriger steht, rückwärts gewendet am Mast は Einer nur steht rückwärts traurig gewendet am Mast と改められている。前者は——である。後者は——である。ここでは、Nur Ein (——)のトロヘウスをさけて Einer nur (——)のダクテュルスを生かし、更に rückwärts (——)をスポンデーウス(——)に発音させてゐるのである。⁽¹¹⁰⁾

初稿をこのように改修することは、たしかに当時の擬古的趣向にそうものであり、ゲーテもまたそれを正当と考え、進んで専門家の意見に従つたのであつた。しかし今日の立場からすれば、かかる擬古的傾向は本来の自然なドイツ語を不当にゆがめたものといわなければならない。フォスが試みた antworten, ehrwürdig などと同様 rückwärts はなんとしても我々の耳に不快に響く。A・ホイスラー

のいわゆる「スポンデーウス病」(Spondeenkrankheit)⁽¹¹¹⁾からゲーテもまたまぬがれることができなかったのである。ゲーテは、古代に対する熱い憧れを、ヘーレナをこがれるファウストに託して語つたことがある。「私だつてこれほどの憧れの力をもつてすれば、又となああの姿をうつつかえすことができるでしょう。」たしかに彼の熱望はついに果たされることになつた。しかし「憧れの力(Gewalt)」は、ドイツ語を不自然にゆがめる弊をさけることができなかった。ちやうどファウストが、せつかく一度はヘーレナをこの世によびだすことに成功しながら、熱狂のあまり再び彼女を見失わなければならないように。

このように、古代調に近づいていつた頃のゲーテの作品は、彼の慎重な意図に基く修正にもかかわらず、概して初稿の方が決定稿より自然であり、表現としても美しいといわなければならない。だから、ヴァイマル版その他の最も権威ある全集がいずれも決定稿に従つてゐるのに反して、エーリヒ・トルンツがハンブルク版を編集するにあつて、あえて初稿をテキストとして採用しているのは、ゲーテ全集編纂史上の一つの注目すべき事件といつてよい。トルンツもいつてゐるように、⁽¹¹²⁾ゲーテの初期の詩については初稿を採用することが珍らしくないのであるから、古典期の詩に対するこの最初の試みは当然認められてよいであらう。しかもトルンツは、無難作に初稿を重視するのではなく、比較対照の上たしかに改良と考えられるばあいには後の稿をとりあげることをも忘れていない。我々としては、トルンツの見識と慎重な操作に敬意を表すると共に、ゲーテ

全集のごとき無数に試みられた編纂の仕事がなお新しい問題を含むことに少なからぬ興味をいだかせられるのである。

すでに述べたように、この時代のゲーテは、初稿がなつた後にも古典学者の意見をいれながら虚心に措辞を改めていつた。一八〇〇年、彼の「新著作集」が刊行されることになつたとき、彼は直接W・シュレーゲルの補筆修正を求めた。こうして、当時彼が試みた幾つかのエレギー形式の詩や「ヴェネチア短唱」が、いわば彼らの共同作業によつて変更を加えられていく。しかしそれはいかにも骨の折れる仕事であつたらしい。その仕事はついに中断される。彼らの手が当然加えられるはずであつた「ローマのエレギー」は、こうして他人の介入をうけることなく、全くゲーテ自身の手稿の形で残ることになつた。今日我々はゲーテだけの責任による「ローマのエレギー」の決定稿をもっている。だからテキスト決定の上で問題はまずないといつてよい。だが、この作品にシュレーゲルの手が直接加えられることはなかつたにせよ、ゲーテはシュレーゲルらの強い影響のもとに、自ら欲しあるいは知らずして他から強制されつつその詩作に従つたであろう。我々は、当時のいきすぎた擬古的風潮が意識的また無意識的にこの作品に深いかげをおとしていることを忘れてはならない。フォスやシュレーゲルによつて迷路にひき入れられたゲーテについて、トルンツは、「ゲーテはフィロローゲではなくつた」⁽¹¹¹⁾といっている。それはまちがいでない。にもかかわらずこれを後世の立場からみれば、彼がきわだつた意味で、そして善悪両様の意味でフィロローゲンポエトだつたことを否定することはできないのである。

三、「ローマのエレギー」の世界

一三三の解釈の試み

Man darf das nicht vor keuschen Ohren nennen,
Was keusche Herzen nicht entbehren können.

(Faust, 3295-6)

純潔な心がなしですまされぬことを
純潔な耳にきかせることは許されぬ。

我々はこれまで、古典期のゲーテを包む当時の擬古的風潮と、そのなかでのゲーテの様式的志向をたずねてきた。ではこのような状況のもとに生まれた「ローマのエレギー」はゲーテ精神の展開においていかなる意味をもっているのであろうか。

まず我々は、上に述べたゲーテのフィロローギシユな様式意志が「ローマのエレギー」とどのようなかわりをもっているかを考えてみなければならない。それはむしろ単に彼の古代への憧憬や古代の詩法の模倣というような審美的形式的な問題につぎるのではない。このことに関して、ゲーテ自身が晩年この作品について語つた言葉がある。⁽¹¹²⁾彼はある日エカーマンに「ローマのエレギー」の幾つかを示した。エカーマンはいう。「個々のモティーフはむしろいいわしいのですが、取扱ひ方が全体に偉大と品位を与えていますから、我々はまるで力強い古代人の声をきくような気がし、ギリシアの英雄時代につれもどされたような思いがします。」ゲーテはそれ

に對してこたえている。「詩形にはいろいろあるが、それぞれ不思議な大きな働きをもっている。もし私の『ローマのエレギー』の内容をバイロンの『ドン・ファン』の調子や詩形に移そうとしたら、全くけしからぬものとなるだろう。」ゲーテの意味するところは明らかであろう。彼が同じ箇所述べているように、古代ギリシア人ならいつでもよいことが、現代の人には口にするのがふさわしくないばかりがある。シェイクスピアの同時代人を喜ばせたことも、一八二〇年代のイギリス人にはもうがまんがならないとされることがある。ところで、今詩人が古代人のようにいわずにいられなくなつたとすれば、彼は古代人の詩形をもつて歌いださざるをえないであろう。では現代人にはがまんがならないことを、あえてゲーテにいわせたものは何か。それを理解するためには、彼の当時の心境にさかのぼつて考えてみなければならぬ。

一七八八年六月、ゲーテはイタリアの旅からかえつた。がヴァイマルの宮廷は彼をむかえるのに非常な無理解と冷淡をもつてした。後年彼が書いた「手稿の運命」(一八一七年)という一文にはつぎのような言葉がみられる。「私は形式ゆたかなイタリアから形態のないドイツへかえつてきた。晴れわたつた空を陰鬱な空にかえた。友人は、私をなぐさめ私をまた仲間に入れてくれるどころか、私を絶望においやつた。彼らの知らない遙かな国について私が喜んだりあるいは失われたものについて私が悩んだり訴えたりすることは、彼らに侮辱を与えるように思われた。私は親身になつてくれるものを一切もたなかつた。誰も私の言葉を理解してくれなかつた。」^(二五)ゲ

ーテのこういう言葉をきくと、彼をとりまく人々がいかにも偏狹だつたという印象をいだきやすい。しかし責任はゲーテにもなかつたとはいへまい。彼自身にとつてそれがどんなに切実だつたにせよ、親しい友人たちを裏切つて一人イタリアにとびだしたゲーテである。彼がかの地でどんなにすばらしい体験をしたにせよ、はじめにすつぽかしをくわせた友人たちに歓呼してむかえてほしいといつても、それはもともと期待する方が無理であろう。旅の途次、彼は度々書簡のなかで、はなれてはいても心は友人たちと共にある、彼らと共に楽しもうとしている、といつてゐるが、出発点で彼らに肩すかしをくわせた責任をまぬがれることはできない。彼はイタリアにあるヘルダーにあてて、「バロメーターがこんなに低く、風景に色彩がないところでは生きることができない」と訴えてゐるが、ゲーテのように勝手に逃げだすわけにもいかず、「生きることができない」土地で生きなくてはならないヴァイマルの人たちが、ゲーテの虫のよさを感じたとしても不思議ではない。ましてゲーテが、「私はついにかくれ家を見つけた。／さらば装える淑女よ、上流の紳士よ、諸君は親類縁者の噂話でもするがよい、／とりすましたおしやべりがすんだら、わびしいカルタに興ずるがよい。／私を時に絶望においやつた諸君、／うちつれてすこやかにすこせ」(「ローマのエレギー」第二歌)と歌つたとき、宮廷人士が怒りを覚えたとしてもあながち無理とはいへないのである。だが、彼の責任によるにせよ、あるいは人々の無理解によるにせよ、イタリア帰來後のゲーテが深刻な孤独感におちいつていた事実是否定できない。そうして、かり

にそれがゲーテの身勝手であつたとしても、それをも正当化する道が彼には残されてははずである。もとよりそれは、彼がイタリアで体験した自己の再生をいかにして芸術的に客観化するにかかつていたのである。

このとき、彼のイタリア体験を開花させ結晶させる契機として彼の前に現れたのがクリステイアーネ・ウルピウスであつた。彼女については由来さまざまのことがいわれている。ただでさえ成りあがり (Parvenu) と見られないではなかつたゲーテが、今また身分の低い女と内縁の関係を結んだことは、宮廷人の間でやかましい噂の種とならずにはいなかつた。あれは下女だ、酒のみだ、作法もわきまえぬあの女のためにゲーテはどんなに苦勞していることだろう等々。しかし、彼女がかりに酒のみで無作法なことがあつたとしても——とヘルマン・グリムはいう——ソクラテスがクサンティッペとの結婚によつてきずつけられないのと同様、ゲーテがきずつくわけではない。まして、ゲーテは彼女を心から愛していた。詩人のために家政の一切を引きうけ、愛児アウグストをゲーテとともにいつくしみ育て、危急に際しては勇敢にゲーテの生命をかばいもした。彼女の死 (一八一六年) がゲーテを絶望におとし入れたというのも誇張ではない。もつとも、その同じ年、「ズライカ書」によつて詩的結婚をなしとげていたマリアンネ・ヴィレマーとの愛を現実のものとするために、彼がフランクフルトの彼女のもとへ馬車をかううとしたことも事実ではあるが。がそれらのことは当面我々にとつて重要ではない。ゲーテが彼女と愛の関係に入つたとき、クリステイアー

ーネはすでにローマの女であつた。「灰色の日我をおおい、暗鬱の空わが眉にせまり、色もなく形もなき北国」(第七歌) にあつて、忘れえぬローマの日々を再び現前させえたのはわずかに彼女とともにする「小さな幸福の園」(kleine Gärten des Glücks—Nietzsche) だけであつた。「褐色の髪せる乙女の姿、たわわなる髪ひたにかかり、短かきまき毛かわゆき首にたわむれ…」(第四歌) „ein bräunliches Mädchen, die Haare/Fielen ihr dunkel und reich über die Stirne herab, / Kurze Locken ringelten sich ums zierliche Halschen…“ このように歌いだされたクリステイアーネは忽ちにしてローマのファウスティナーネのイメージと重なり、詩人は愛するものと共に早くもローマの地にある。「ああかの日々のいかに幸多かりし——されどやめよ、時はすぎぬ、われは今、おおローマの髪よ、汝らにまかれたり」(第四歌) „O wie war ich beglückt — Doch stille, die Zeit ist vorüber, / Und unwunden bin ich, römische Flechten, von euch.“

詩人がローマの愛をローマ伝来の形式で歌うのはまことに自然である。しかしそこには今一つのことが考えられるであろう。暗鬱な空のもと、口さがない宮廷社会で、ここに描かれたような自由な愛を享受するためには、彼らの世界を外界から隔絶することを必要としたであろう。じつさい、ここに歌われたことは、素材的にみればおよそ従前の文学には未曾有のことであつた。

Find' ich die Fülle der Locken an meinem Busen! Das

Köpfchen

「ローマのエンギー」 小栗

Ruhet und drücket den Arm, der sich dem Halse bequemt,
Welch ein freudig Erwachen, erheilet ihr, ruhige Stunden,

Mir das Denkmal der Lust, die in den Schlaf uns gewiegt! —
Sie bewegt sich im Schlummer und sinkt auf die Breite des
Lagers

Wegewendet, und doch läßt sie mir Hand noch in Hand.

(XII)

(われは見出す、わが胸にかかるたわわのまき毛。

うなじの下にさし入れしわが腕にそのこうべからく休めり。

げにもうれしきめざめかな。静けき時よ、

二人してね入りしときの快楽の名残、汝らは保ちたりしか。

まどろめるかの女ねがえりてひろきふしどに沈めり、

されどその手なおわが手に残れり)

このような表現は、教養あるヴァイマルの貴顕淑女らを驚愕させるに十分であつた。キリスト教の精神主義が性について語ることをきびしく禁じていた社会にあつて、ゲーテのとらわれぬ自然讃美がどのように受けとられたかは想像にかたくない。この頃ゲーテに反感をいだいていたシュタイン夫人が「私はこの種の詩は全然わかりません」^(三三)とそつけないつてゐるのは当然としても、ヘルダーのごとき人までがこの詩の公刊をひかえるようにすすめている。^(三三)メフィスト^(三三)がいつているように、「純潔な心がなしですまされぬことを、純潔な耳にきかせることは許されな」かつたのである。だが、詩人は本来沈黙することを好まない。歌わぬ詩人は詩人ではない。しか

も語るべき友も公衆もたぬとき、詩人は現代を超えてて古代人のように歌いだちあををえなむ。「ローマのエンギー」のデイスティロンは、ドイツの詩人たる彼が古代人のように生きまた生きること余儀なくされたための形式的必然だつたのである。

Schwerer wird es nun mir, ein schönes Geheimnis zu wahren,

Ach, den Lippen entquillt Fülle des Herzens so leicht!

Keiner Freundin darf ich's vertraun: sie möchte mich schelten;

Keinem Freunde: vielleicht brächte der Freund mir Gefahr.

Mein Entzücken dem Hain, dem schallenden Felsen zu sagen,

Bin ich endlich nicht jung, bin ich nicht einsam genug.

Dir, Hexameter, dir, Pentameter, sei es vertraut,

Wie sie des Tags mich erfreut, wie sie des Nachts mich

beglückt.

(XX)

(わが美しきひめごとつつむはかたし、

ああそは胸よりあふれ唇をついて出ず。

されどそを女の友に告ぐるはかたし、われをそしらん、

男の友に告ぐるもまたかたし、われあやうからん。

この喜び、森に歌ひ岩に語らんには

われすでに若からず、しかく狐独にもあらず、

さればヘクサーメターよ、またペンターメターよ、

われは汝らに語らん、昼のよろこび夜のしあわせを)

かくしてゲーテは今ローマの詩人のように語る。それは、後年彼が戦乱のヨーロッパをのがれるために、自らベルシア人として身を

装うたのと同様である。

だが我々は先を急ぎすぎたようである。うかうかと「ローマのエレギー」の世界にまぎれこんでしまつたらしい。ここで我々はあらためてこの作品全体の構成から考えなおしてみなければならぬ。

「ローマのエレギー」においてまず目につくのは、それが全篇二十歌からなる連作をなしていることである。連作 (Zyklus) という形式はゲーテの詩作体験においてかつてなかつたことである。これまで彼は、昂揚した個々の体験を一回的な即興詩の形で表現してきた。それぞれの瞬間は二度となされえないが、まさにそれゆえに、瞬間は体験にひそむ永遠性を直観的に象徴する。詩作 (dichten) は体験を濃縮する (verdichten) のである。が今彼は、一つの体験を中心にして、それに多面的な光をあてることによつて、その体験の意味をいわば分析的多層的に表出しようとする。かつては、一つの瞬間が永遠を包蔵するゆえに、その瞬間の把握がそのまま絶対的な価値をもつことができた。しかし今は、一つの体験を構成するさまざまな瞬間をして、この体験を相互補足的にたらし出させ、それによつて体験の意味をつくそうとする。それぞれの瞬間が独立して存在を主張するのではなく、一連の詩群が円環をなすことによつてそこに表出された体験の意味もまた完結する。個々の瞬間の意味が軽んじられるのではないが、瞬間がそのみで絶対視されるのをさけ、詩人はそれに全身をゆだねることを慎重にさしひかえるのである。瞬間に対するこのような態度は、若いゲーテと古典期以後のゲーテをはつきりと区別するものであり、連作という新しい形式は、

詩人のかかる態度の変化に相應する。事実この形式は、「エレギー」にはじまり、「ヴェネチア短唱」(一七九〇年)、「クセーニエン」(一七九五—六六年)、「ソネット」(一八〇七年)をへて「西東詩集」(一八一九年)にまで及ぶのである。グンドルフは、ゲーテがイタリア体験を通じてかつてのヴェールテ的—ファウスト的な感情人 (Gefühlsmensch) から目の人 (Augenmensch) になつたという。ゲーテが目の人といわれるのは別に新しいことではない。ゲーテが生来抽象的思索を好まず、つねに具体的直観を重んじたことはたしかである。しかし、古典期以後のゲーテが特に「目の人」といわれるばあい、それは彼が従来とは異なる「視る」態度を意識的に体得したことを意味する。形式的抽象をしりぞけることはもとよりであるが、直観や第一印象に伴いがちな主観の勝手なひとり歩きをおさえることが主眼とされるのである。この意味で、彼が旅の途次日記に書いたつぎの文章は注目値する。

「対象の純粹な印象をえようとするならばともかくくり返し見なければならぬ。第一印象というのは奇妙なもので、そこには必ず真実と虚偽とが甚だしくいりまじつてゐる。」

またカール・アウグストにあててこう書いている。

「外国人が偉大な記念碑を一目見ただけでそれからうけた特別な印象を書きしるすのをみるたびに私はひそかに笑いを禁じえませぬ。」

ある対象の本質を一つの視点から見ぬこうとする主観は、対象の一面を鋭くとらえうるかもしれない。しかしゲーテは、そこにどう

しても混入する主観の恣意性をおさえて、多角的に対象をてらしだし、むしろ対象そのものをして語りださせようとする。かかる態度は、自己の体験を表出するにあたつて、一瞬間の威力に絶対の信頼をおくことをひかえ、さまざまな局面を通じて体験の意味を自らあらわならしめようとする態度に通じる。一つの核心は、幾重にも照射と曲折を与えられることによつて的確にその真相をあらわす。かくの如きがゲーテの連作形式の意図するところなのである。この意味において、「ローマのエレギー」は彼の詩作活動における重要な一時期を劃するものといわなければならない。

しかし連作という形式は、描かれるべき主題が順をおつて発展的に叙述されることを意味するのではない。なるほど「エレギー」の第一歌は永遠の都ローマへの呼びかけにはじまる。

Eine Welt zwar bist du, o Rom; doch ohne die Liebe

Wäre die Welt nicht die Welt, wäre denn Rom auch nicht

Rom.

(おおローマよ、お前は一つの世界にはちがいない、

だが愛なくて

世界も世界ではない、ローマもローマではない)

この詩句はローマにおける詩人の愛をひきいれるための導入の言葉としてふさわしい。しかし以下二十の歌は、物語としての発展を何ら意図していない。詩人の愛をめぐるさまざまな場面が脈絡なしにつらねられているにすぎない。最後の第二十歌も、全体をしめくくる結びの意味をもつてはいない。だから我々は、この詩集の意味

をさぐるためには、それぞれのテーマをえりわけ、再構成し、その意味するところをすくいあげてを試みなければならないのである。

「ローマのエレギー」はほぼ三つの契機からなりたっている。その中心をなすのはむろんローマにおける詩人とファウステイーネとの愛である。がローマは必然的に古代とつらなるゆえに、古代神話の世界が彼らの世界に重なりあう。古代ローマなくして二人の愛は完全たりえない。がローマもまたこの愛ゆえに永遠の都たりうるのである。詩人によつてよびだされる古代の神々や英雄たちは、彼らの愛を多彩にかざるとともに、北方の教養ある俗物から彼らをまもる守護神となる。そうして、この愛の世界をしつかりと支えるように、詩人はヘクサーメターとペンターメターの詩形を用いるのである。

では、詩人がここに展開するエロティカ・ロマーナはどんな意味をもっているのか。彼は何故に肉のよろこびをこれほどあからさまに歌うのか。それはむろん後世の自然主義風な現実暴露とは関係がない。またかつての疾風怒濤においてのような激情的な自然讃美とも次元を異にする。古典主義が疾風怒濤に対するアンティテーゼであるならば、ここに強調される自然には、以前とは異なるより高い意味がこめられているはずである。我々は、先にあげた三つの同心円——愛、ローマ、古代——を念頭におきつつ、この世界の解釈を試みなければならない。

ローマの愛——それは詩人にとつてまず第一にあらゆる社会的制約を脱して官能を自由に解放することを意味した。彼は過去十年に

わたる宮廷生活で、六歳年長の貴婦人に、もつぱら精神的な——彼の成長のために必然的だったとはいえ今や不自然と思われる——愛をささげてきた。彼の古典主義的志向は、たしかに宮廷におけるこの自己形成の努力と結びつくものであつて、彼のイタリア体験もその一直線の延長上にあると考えることができる。しかし北方の生活雰囲気において要求されていたこととくらべるならば、イタリア体験の成果はまさにその反極への転回とさえ考えられる。かつて、「意にかなうことが許される」ことを欲したタソーは、「ふさわしいことが許される」という道徳的要請の前に敗北した^(III)。社会的約束にかなう道徳的生活——これがヴァイマルでゲーテが自らに課した生活理想であつた。しかし今ローマにあつて彼が享受する愛の生活は、良風美俗の使徒たちの面をそむけさせるに十分であつた。ゲーテの古典主義は、イタリアの旅を機として明らかに一つの変貌を示しているのである。

愛なくしてローマはローマたりえずと歌つた詩人は、今ファウスティーネをえて至福の境にある。

O wie fühl' ich in Rom mich so froh, gedenk' ich der Zeiten,

Da mich ein graulicher Tag hinten im Norden umfing!

(VII)

(おおわれローマにありていかにうれしき、

北国にありしとき灰色の空重くたれこめしが)

がもとより彼は旅のつれづれに快楽をおう気ままな遊客ではない。彼は何よりも詩人である。久しく「身をけするようないで」

この地にあこがれ、ついにここにいたりついた北方の詩人である。アーモルに仕える彼は、その喜びのゆえにまた日々忙しく古代を学ぶことに心をかたむける。

Froh empfnd' ich mich nun auf klassischem Boden begeistert,
Vor und Mitwelt lauter und reizender mir.

Hier befolg' ich den Rat, durchblättrte die Werke der Alten
Mit geschäftiger Hand, täglich mit neuem Genuß.

(V)

(こ)古典の地にありてわが胸よろこびにふるう

過去現在共にいよよ高きいよよ美しくわれによびかく。

ここに於てわれ教に從ひ、日々忙しく

新たなる喜びもて古人の書をひもとく)

こうして古典の心にひたるとき、わが前に横たわる女はいつしか古きローマの、古代の化身となる。

Diese Formen, wie groß! wie edel gewendet die Glieder!

Schließ Ariadne so schön: Theseus, du konntest entfliehen?

(XII)

(こ)形のいかにおおなる、この四肢のいかに

あてにうねりたる。

アリアドネーかくも美しく眠りてあらば、テーゼウスよ、

汝とてもすて去るをえざりしならん)

Und belehr' ich mich nicht, indem ich des lieblichen Busens
Formen spähe, die Hand leite die Hüften hinab?

「ローマのエレギー」 小栗

Dann versteh' ich den Marmor erst recht...

(V)

(目はいとしき胸の形をさぐり

手は腰のへをすべりゆくとき

大理石の秘奥をわれはさとりぬ...)

詩人は愛のしあわせを古えの英雄の功業にも比すべきものと考え
(第十歌)。いやそれどころか、彼は自らが神々につらなるもの
とさえも思うのである。

O vernimm, Jupiter Xenius, mich!

Wie ich hereingekommen, ich kanns nicht sagen: es faßte

Hebe den Wandrer und zog mich in die Hallen heran.

Hast du ihr einen Heroen herauf zu führen geboten?

Irrte die Schöne? Vergib! Laß mir des Irrtums Gewinn!

(VII)

おお、きたたまえ、餐応の神ユピテルよ、わがねがいを。

いかにして我ここに召されしやを知らず、

旅する我をヘーベーのとらえてこの館に導きしなり。

英雄を宴によべと汝の命じたりしか。

美しきヘーベーの誤ちなりしか。さらば許したまえ。その誤

ち我に幸いしたるなれば)

詩人はローマにおける愛の生活を神々の世界にまで高める。そこ
には官能に対するいかなる北方的なやましきもない。官能の喜びは
かつてないほどの自由をもつて前面におし出される。だが、すでに

ファウステイーネが単なる官能の具ではなくローマの化身とされて
いるように、愛しあう二人はもとよりいたずらな官能の奴隷ではな
い。人が口をとぎして語らぬ世界に身を沈めながら、精神はますます
輝きを発し、優雅がこの世界を支配する。だがまた、そこにある
喜びは、古えの神々にのみ許されたであろうような原初の無垢な喜
びではない。それは、シラーがいつた意味でのナイーフな愛ではな
い。詩人は、北方の暗い世界を逃れたとはいえ、依然として北方の
人間たらざるをえない。だから、詩人はこの愛を実は第二の自然と
して設定しているのである。グンドルフは、ゲーテのこのような境
位を簡潔につきのうにいう。「ゲーテは神々をギリシア人として
ではなく……ギリシア人のように創造する」と。ホメロスにとつて
オリュンポスはなお実在であつた。がゲーテにとつてそれはもはや
失われた理想なのである。彼は自己形成の目的のためにそれを芸術
的に現実によびもどそうとする。この意味で、ゲーテはシラーのい
うナイーフな詩人ではなく、まさにゼンティメンタリシユな詩人
なのである。にもかかわらずシラーがゲーテをナイーフとよぶのは、
総じてゼンティメンタリシユたらざるをえぬ近代詩人のなかでゲ
ーテが最もよく自然に迫りえたという意味に他ならない。
ここにおいて我々は、古典期におけるゲーテとシラーの意図が全
く同じ方向を目標していることに気がつく。シラーは歌っている。

Zwischen Sinnenglück und Seelenfrieden

Bleibt dem Menschen nur die bange Wahl;

Auf der Stirn des hohen Uraniden

Leuchtet ihr vermählter Strahl. (四〇)

(Das Ideal und das Leben)

(官能の喜びと魂の安らぎとのいづれかを

人間はふるえる手でえらぶしかない、

だが高貴なるウラノスの子の額には

それら二つのめあわされた光が輝いている)

理想と現実との矛盾、精神と官能との相剋は、シラーの思索を通じる根本主題の一つであるが、彼はこの問題を古代ギリシアと近代との対立としてとらえている。「美的教育論」の第六書簡で彼はいう。「時代的性格に少しく注意してみれば、人間性の今日のあり方と、昔の、特にギリシア人のあり方との間にある著しい対照に我々は驚かざるをえない。……もろもろの精神力が美しく目ざめたあの時代には、官能と精神とはまだ厳密に区別された自分だけのものをもたなかった。なぜなら、それらは矛盾対立によつて刺戟されることになかったから、両者が敵対的にわかれて境界をきめるなどということが必要としなかつたのである。……だが我々近代人においては何と事態が變つてゐることであらう。」(四一) オリュンポスの神々のところでは、そよ風のように軽やかな生が、永遠に明るく鏡のように清らかにいとなまれている。月は移り年は去つても、神々の青春は人の世の移り変りをよそに咲きほこつてゐる。しかるに、人間はこのみじめな地上にあつてついに神々の幸福にあずかることはできないのか。死の国にあつて精神の自由をえることはできないのか。官能の喜びと魂の安らぎとの間をたえず動揺し分裂の苦悩にうちひしがれ

るのが人間のさだめなのであらうか。シラーのこの問題はまさしくゲーテもまた自らに課したものであつた。「自然を自己のうちにとり入れて、その限らない美点を汝自身の限りない特権とめあわせ、この両者から神的なものを生み出すように努力せよ。」(四二) シラーのこの要請はゲーテのそれと全く同じといつてよい。しかしシラーにおいては、自然と人間とがはじめから和解しがたく対立している。いやむしろ、彼はその対立の和解を求めるのではなくて、人間の自然な官能を屈服し、それをとびこえて一挙に理想の自由境に高まろうとする。「地上の憂いを投げすてよ。暗鬱狹隘な人生を脱し理想の国へ逃れよ」(「理想と人生」)。そこには英雄的な戦いがある。あるいは禁欲的な苦行がある。しかし、官能の幸福と魂の安らぎの融合調和に完き人間性が求められるべきであるならば、シラーはこの問題に対して十分な解答を与えたとはいえない。美的教育によつてこの理想をかがげながら、彼はその実作によつてかかる理想境を現実にすることはできなかった。彼にあつては「官能の幸福」はついにとざされた世界におわらざるをえなかつたのである。しかるにゲーテは、安んじて官能の世界に身をゆだねる。精神の真の自由と高貴は、官能の否定によつてではなく、かえつてそれをいかに肯定するかにかかつてゐるであらう。人間的な「魂の安らぎ」は、一方面的に生をとびこえて靈界に赴くことによつてではなく、「官能の幸福」を豊かに享受しつつ同時にこれを精神たらしめることによつてえられるであらう。この困難な問題の解決を可能ならしめたものは、ゲーテが古代から学びとつたナイーフな人間肯定の立場であつた。も

とより、それは彼の稀有な資質を除いては考えられないが、その決定的な契機となつたのは彼のイタリア体験であつた。かかるゲーテのナイヴィテートは、つねに全体的人間存在から切りはなされることとがない。官能は緊密に精神と融和し、そのいかなる発露においても優雅を裏切ることがない。それはまさにシラーが「美的教育論」において理想とした境地であつた。だから、その志向を同じくしながら自らは解答を与ええなかつたシラーは、ゲーテのこの作品に対して心からの讃辞をおくつた。彼の主宰する雑誌「ホーレン」のためにこの原稿が送られたとき、シラーは喜びの言葉をゲーテによせている。『エレギー』を送つていただいて私たちはみな非常に感謝しております。この作品にみなぎるものは、心情の温かさ、繊細さそして醇乎たる詩人的精神です。かかる精神の発露は、今日の低俗な詩壇にあつてまことに喜ばしいものであります。^(四三)これが単なる形式的なお世辞でないことは、シラーが翌年発表した「素朴文芸と情感文芸」において、しばしばこの「ドイツのプロペルツ」に言及し、「この詩人においては自然が他の何人においてよりも真実に純粹にはたらいっている」といい、ヴォルテール、ラクロの如きが単に機智的、好色的であるのに対し、ゲーテは「詩的、人間的、かつ素朴である」といつているのによつても知られるであらう。^(四四)

四、擬古主義からの脱却

以上において我々は、古典期のゲーテの展開が擬古主義とともにはじめられ、「ローマのエレギー」においてその完き開花をむかえ

たことを見た。この作品は、ヴァイマル前期に詩人の胸中を支配した古典への熱烈な憧れがイタリア体験によつて実現されたことを示すとともに、古典主義そのものにおいても重大な変容がなされたことを詩的に実証するものであつた。「ふさわしいことが許される」という、あの規範的命令的な制約はのりこえられ、「氣にすること」が同時に「ふさわしい」という、精神の自由の境地がここにえられた。シラー流にいえば、ジンリヒなものとゼーリシュなものとの幸福な和解がついになしとげられたのである。「ローマのエレギー」はもはや単なる古代の形式的模倣——擬古主義——ではない。それは、感性と理性、現実と理想の矛盾対立という、シラーによつて提出された近代性の本質にひそむ問題に対するまことに独創的な解答であつた。だが、ゲーテがかかる境地を芸術化するために、内外の事情に迫られて用いた古代の詩形は、彼の憧憬の実現とともにその役割をおえる。彼は久しい間異常な熱意と謙虚な態度でこの詩形の習得に心がけてはきた。しかし、彼の人生行程においてしばしば見られるように、一つの階段がその存在意義を果たすとき、早くも彼はそれをすぎ去つたものとして感ぜざるをえなくなる。その後彼が同じ古代調で試みた作品は、「ライネケ・フックス」(一七九三年)、「ヘルマンとドロテア」(二七九六年)、「アヒレーイス」(断片、一七九九年)などであるが、以後彼は次第にこの形式からはなれていく。「年代記録」によれば、一八〇六年「ヴィルヘルム・テル」の叙事詩化をアレクサンドリーナーで試みようとしたことがあるが、^(四五)この計画は実現せずにおわつた。やがて、彼の詩形に対する古典学

者たちのわずらわしい忠告や時には悪意ある批評は、この詩形によせる彼の愛情をもさめさせてしまふ。フォスはある書簡でいつてゐる。「ゲーテの『ライネケ・フックス』を読みはじめたがとても読みとおせるしろものではない。ゲーテは、ヘクサメーターでまずい箇所があつたら注意してほしいと私にたのんだが、正直にいうと全部がまずいといわざるをえない。」^(四六) フォスとは仲のわるかつたW・シュレーゲルもこの点ではフォスに組し、ヴァイマルの両詩人に皮肉をあびせる。

Eure Hexameter sind der natürlichste Naturalismus.

Nimmer begriff eur Ohr jenes hellenische Maß.^(四七)

(君たちのヘクサメーターは自然きわまる自然主義だ、ヘラスの詩格はついで君たちの耳には入らなかつたのだ)

生来強情だつたらしいシラーは、こういう攻撃に対してむろんひるむことなくやりかえしている。シュレーゲルの一詩に対して彼は「クセーニエン」で応じる。

Alles in deinem Gedicht ist vollkommen, Sprache, Gedanke, Rhythmus; das Einzige nur fehlt noch: es ist kein Gedicht.^(四八)

(君の詩は全く申し分ない、言葉も思想も韻律も。)

ただ一つおしいことにこれは詩とは申されぬ)

この問題については控えめだつたゲーテもついに彼らに対する反感を表明するようになる。一八〇七年三月十四日クネーベルあての書簡には、「近頃の韻律理論にはポエジーがない」といふ言葉が見られるし、一八〇八年六月二十二日ツェルターへの書簡では、「フ

ォスはただただ韻律に従おうとしたためにポエジーをすっかりなくしてしまつた」といつてゐる。^(五〇) この種の論争にはむろん和解はありえない。形式の上からいえばフォスらの言い分にも理由がなくはない。しかし、フィローゲならざるゲーテの古代調の詩に、形式をこえて人に迫る美しいもののあることを、我々はむろんまた否定できないのである。この論争に対する正しい判決は、後年プラッテンが「ヘルマンとドロテア」によせたエピグラムによつて与えられてゐるであらう。

Höipricht ist der Hexameter zwar; doch wird das Gedicht stets

Bleiben der Stolz Deutschlands, bleiben die Perle der Kunst.^(五一)

(このヘクサメーターはなるほどぎくしゃくしているが、この詩そのものはあくまでも)

ドイツの誇り、芸術の真珠たることにはかわりはない)

ともあれ、ゲーテは「ローマのエレギー」によつて古典主義の根本的な課題をはたした。ここに彼の制作の一時期はおわる。つづく数年間は、大作「親和力」(一八〇九年)を除き、主として自己の過去をかえりみそれを整理する仕事に集中される。「詩と真実」第一卷(一八一一年)、第二卷(一八二二年)、第三卷(一八一四年)がその成果である。彼は新しい詩精神の開花をまちのぞみつ、やがて西東的世界に自己を開いていくのである。

(20. Aug. 1662)

- (1) Cottas Jubiläumsausgabe, Bd. 5, S. 13.
 (11) ibid. Bd. 26, S. 143.
 (111) Gundolf: Goethe, S. 426.
 (1111) Nietzsche: Unzeitgemäße Betrachtungen, Richard Wagner in Bayreuth, Kröners Taschenausgabe, Bd. 71, S. 382.
 (11111) Vgl. Nietzsche: Über die Zukunft unserer Bildungsanstalten, Kröners Taschenausgabe, Bd. 71.
 (111111) Jacob Burckhardt: Griechische Kulturgeschichte, Kröners Taschenausgabe, Bd. 58, S. 14.
 (1111111) ibid. S. 331.
 (11111111) Heine: Französische Maler, Heines sämtliche Werke, Hoffmann u. Campe, 1890, Bd. 10, S. 149, auch die Romantische Schule, Bd. 1. ibid. Bd. 7, S. 122. ところがヘーデルは「このロマンチックな W. Menzels 的『ヘーデル』」を鑑賞した文を著している。Die deutsche Literatur von Wolfgang Menzel, 1828; Heine: ibid. Bd. 12, S. 165.
 (111111111) Nietzsche: Über die Zukunft unserer Bildungsanstalten, Kröners Taschenausgabe, Bd. 71, S. 444.
 (1111111111) Schiller: Über naive und sentimentalische Dichtung, Schillers sämtliche Werke, Cottas Säkularausgabe, Bd. 12, S. 201.
 (11111111111) Vgl. Staiger: Goethe, Bd. 2, S. 234.
 (111111111111) Poetische Werke von J. H. Voß, Hempel, S. 2.
 (1111111111111) ibid. S. 3.
 (11111111111111) Cottas J. A. Bd. 6, S. 171.
 (111111111111111) Hehn: Einiges über Goethes Vers in Gedanken über Goethe, S. 381.
 (1111111111111111) Cottas J. A. Bd. 1, S. 174.
 (11111111111111111) ibid. S. 381.
 (111111111111111111) Weimarer Ausgabe: I. Abtheilung, 1, S. 265.
 (1111111111111111111) Hamburger Ausgabe, Bd. 1, S. 185.

- (11111111111111111111) Vgl. Anmerkungen von Erich Trunz zum 1. Bd. der Hamburger Ausgabe, S. 484.
 (111111111111111111111) Vgl. Kleines literarisches Lexikon, hns. v. W. Kayser, Sammlung Dalp, III. Aufl. Bd. 1. S. 217.
 (1111111111111111111111) ibid. S. 486 f.
 (11111111111111111111111) ibid. S. 485.
 (111111111111111111111111) Eckermann: Gespräche mit Goethe, am 25. Feb. 1824, Brockhaus, S. 70 f.
 (1111111111111111111111111) Schicksal der Handschrift, Hamburger Ausgabe, Bd. 13, S. 102.
 (11111111111111111111111111) 4. Sept. 1788, W. A. IV. Abth. 9, S. 19.
 (111111111111111111111111111) Hermann Grimm: Das Leben Goethes, neubearbeitet v. R. Buchwald, Kröners Taschenausgabe, Bd. 162, S. 313.
 (1111111111111111111111111111) シュライマハー・エッセイの註は最近までかなり動揺している。筆者はヘンスト・ボイトラーのゆきとらした文書が彼女について決定的なものである。Vgl. Beutler: Christiane in Essays um Goethe, Sammlung Dieterich, Bd. 101.
 (11111111111111111111111111111) Vgl. Nietzsche: Menschliches, Allzumenschliches, Nr. 591, Kröners Taschenausgabe, Bd. 72, S. 331.
 (111111111111111111111111111111) シュライマハーの名は「ローマの英雄」では第十七歌に「歌出」だけである。「ヴェネチア短唱」でも現れるこの名の女性にはゲーテのローマにおける愛人であらうとされ、物書きの人たちが記録によって証拠だてようとした。しかしシュライマハーによれば、「このせんぞくの前提は疑わしい。あつてはたしかにその結果はシュライマハーの理解になんの役にもたたらない」といふ。Staiger: Erläuterungen zu den Gedichten Goethes, I. Manesse Bibliothek der Weltliteratur, S. 489.
 (1111111111111111111111111111111) Brief an Charlotte Schiller am 27. Juli 1795, zitiert in Hamburger Ausgabe Bd. 1, S. 490.
 (11111111111111111111111111111111) Goethes Brief an Knebel am 1. Jan. 1791, W. A. IV. Abth. 9, S. 239.
 (111111111111111111111111111111111) 連作形式の意義については、多くの学者が見解をのべている。z. B.

Gundolf: Goethe, S. 440 ff. Korff: Goethe im Bildwandel seiner Lyrik, Bd. 1, S. 303 f.

(三四) Gundolf: ibid. S. 440 f.

(三五) Tagebuch am 24. Sept. 1786, W. A. III. Abth. 1, S. 228.

(三六) Brief an Karl August am 17. Nov. 1787, W. A. IV. Abth. 8, S. 292.

(三七) Vgl. Goethes Torquato Tasso II. 1. ターテと少女との間にかよわれるこの対話はこの作品の主題があらわれているが、これは疾風怒濤からマリアン前期への転回を暗示する注目すべき箇所である。Vgl. Korff: Geist der Goethezeit, II. Theil, S. 169.

(三八) Gundolf: ibid. S. 437.

(三九) Über naive und sentimentalische Dichtung, ibid. S. 220.

(四〇) ibid. Bd. 1, S. 192.

(四一) Briefe über die ästhetische Erziehung des Menschen, ibid. Bd. 12, S. 16 f.

(四二) ibid. Bd. 12, S. 179.

(四三) Schillers Brief an Goethe am 28. Okt. 1794. Briefwechsel zwischen Schiller und Goethe, Eugen Diederich, 1910, Bd. 1. S. 32.

(四四) Über naive u. sent. Dichtung, ibid. S. 220.

(四五) J. A. Bd. 30, S. 191 f.

(四六) Brief an seine Frau am 13. Juni 1794, zitiert in „Der Tatentlose—Goethe“, Auswahl von W. M. Treichlinger, Pan-Verlag, Zürich, 1949, S. 35.

(四七) Zitiert in Hehns Gedanken über Goethe, S. 380. この詩のできた年は不明である。クーラの説明によると、シェラーゲルがゲーテ・シラー往復書簡集を見て、自分のことをよくいわれていないのを知り一矢むくいたものという。書簡集がはじめてでたのは一八一八～九年であるから、その直後のことであらう。しかしシェラーゲルが内心感じていたことを早くから感じないとはゲーテはほんやりではなかったであらう。

(四八) Schiller: ibid. Bd. 2, S. 105.

(四九) Goethes Brief an Knebel, W. A. IV. Abth. 19, S. 283.

(五〇) W. A. IV. Abth. 20, S. 85.

(五一) Platens Werke, Meyers Klassiker, Bd. 1, S. 269. この詩の成立時期は一八三〇年前後と考えられる。

〔後記〕ニーチエの文献について、同僚茅野良男先生の親切な御教示をえた。ここにあらう感謝の意を表する。